

イエスの祈り(その二)

「イエスの人里離れたところでの御父への祈りは、『群衆を解散させてから』(マタイ14・23。マタイ15・39、マルコ6・45参照)、『夜を徹して』(ルカ6・12参照)、『朝早く』(マルコ1・35)などと記されています。これは何を意味するのでしょうか。単にこうした時間帯のほうが、一人になりやすいからというだけでしょうか。そうではなく、イエスには日中、御父からゆだねられた大切な使命があったのです。イエスにはいつもご自分は御父から派遣されているという自覚がありました。民衆を教え、病人をいやし、罪びとに希望を与え、ファリサイ人に挑戦し、飢えた人々にパンを配られました。また、あるときには野宿をし(マタイ8・20、ルカ9・58参照)、宣教活動のために巡り歩き(マタイ4・23、9・35、マルコ5・6参照)しばしば疲れて休息を求められました(ヨハネ4・6参照)。このようにイエスは御父のみ旨にそって働く人だったのです。そのため、日中の労働が終わってから、御父と一対一で向かい合い、もっぱら御父にのみ、心を上げて祈られたのです。

祈りが生活のリズムから遊離してしまっていて、いつも教会の中にその姿を見かけるのに反し、家での仕事はきちんとしているのかどうか、あるいは職場でまじめに働いているのかどうかよくわからない人に出会うことがあります。また、二言めには祈りが大切だと主張するにもかかわらず、貧しい人や隣人に対する姿勢にしても、周囲とのかかわりについても、あまり望ましいようすには見えない人たちもいます。神のみ旨を行おうとする生活のリズムの中にこそ、本当の祈りが育つのです。懸命に労働して生きる中で、イエスや御父と二人っきりになれる時を持つことに渴き、それが得られたときに、他のあらゆることから離れてもっぱら神に向かうことができる心こそ、尊い祈りの心なのです。

今上に挙げた例とは逆の誤りもあるかも知れません。それは人々のために働きさえすれば、それ自体が祈りであるからことさらに孤独の祈りの時は必要ないという考え方です。このような考え方に対し、神にのみもっぱら心を上げて祈ることが必要であることを理屈では説明できないかもしれません。でも自分にとって神がとても大切なかたで、自分が行う労働も勉強も睡眠も、楽しみも苦しい試練もすべてを神にささげたいと思う

ような心を持つ人が、一切を離れて愛する相手である神と向かい合う時を持ちたいとの
渴きを覚えることは、まったく自然なことなのです。

イエスは、ひたすら御父にのみ向かう時を大切にされました。」

(「カトリック教会の教え」カトリック中央協議会 431 頁～432 頁)